

# 『立教経済学研究』創刊のころ

鈴木圭介

—

僕が立教大学経済学部を卒業して、助手に採用されたのは昭和一二年のことであった。その年は後で述べるように立教大学経済学部にとってきわめて重要な転換の年であったが、国際的視点から見れば一九三七年恐慌の起った年であった。一九二九年の世界大恐慌のあと、ローズヴェルトのニュー・ディール政策がはじまり、景気もいくらか挽回したかに見えたアメリカで、大恐慌にくらべれば規模は小さいが、しかし、それ以上に鋭い恐慌がこの年に起っていたのである。それは、ニュー・ディール政策に景気万能薬的效果が欠けていることの証拠だといわれていた。しかし日本では経済恐慌の感じはなく、それより、とうとうたる軍事経済の渦の中に入っていく、思想・文化は暗い谷間の時代に滑り落ちていった。僕がその年、河西太一郎教授に提出した卒業論文のテーマは「明治維新と農業問題」だったが、非常な圧迫感をうけながら執筆したものだ。そしてつい七月七日には蘆溝橋で「事件」がおこり、日中戦争（当時「日支事変」といった）が勃発してしまった。僕自身、今まで学生身分のために延期されていた徴兵

検査をうけ、第二乙種合格ということになった。つまり、すぐ入隊ではないが、いつ召集をうけるか判らないという状態におかれた。友人たちの間にはもうポツポツ召集がはじまっており、身辺の誰それに次々に赤紙が来た。自分を中心にその着弾の輪が次第に狭まり、まるで狙いうちされているように不安で、よそから電報がくるとハッと胸をつかれるような日々になりつつあった。こんな時期なのに、やはり僕は若かったし、立教大学の環境もよかったので、元氣一杯であった。この年は、立教大学経済学部にとって重要な年であったばかりでなく、僕個人にとっても大切な岐路の年であった。実はこの時、卒業にあたって南滿洲鉄道調査部に採用が内定していたが、経済学部からのお話で新たに設けられた助手制度の最初の適用をうけて助手になることの方を選んだ。僕と一緒に同級の李容漢君も助手となった。彼は間もなく母国に帰って、普成専門学校の教職につくことになっていたのである。僕はこれで満足であった。初任給は五〇円であった。勿論、一流会社や満鉄に比べずつと低い給料であったが、僕はこれで満足であった。もし、あの時満鉄に入っていたら、僕もきっと友人たちと一緒に、昭和一七年九月二九日の満鉄調査部事件にひっかかっていたにちがいない。立教の予科で同級生だった故吉植悟君（後に経済企画庁研究所長になった）も同じ年に満鉄に入社し、事件に連座したが、彼はさわめて勇氣ある態度で終始したと聞いている。

## 二

僕が助手に採用されるについては、河西太一郎教授と山下英夫教授の特別の推輓があったためである。とくに山下教授は当時小壮氣鋭の若手教授で、緊密に接触してなにくれとなく面倒を見て下さった。その頃の経済学部は、木村重治学長が学部長をかね、経済学科長は河西太一郎、商学科長は須藤吉之祐教授で、兼任に、田辺忠男、本位田祥

男、山下英夫、大塚久雄の諸教授がいた。

経済学部の大黒柱の河西教授は東大新人会の指導者であったが、大原社会問題研究所を経て立教へ来られ、すでに何冊かの翻訳の他に『農業問題研究』（改造社・一九二五年）や、「マルキシズム農業理論の発展」（改造社『経済学全集』第二六卷、一九二九年）があり、立教大学の雑誌『商学論叢』に、農業恐慌などに関する論文を六、七篇発表していた。河西教授の指導方法は一種独特であった。こちらが勢いこんで話していると、フーンフーンと聞いていて、急にアッハッハと笑って、何か皮肉っぽいことをぐさりといわれるというふうだった。これが河西教授のしごきだった。田辺忠男教授は東大経済学部の右派の一人で土方成美、本位田祥男教授などと組んでいわゆる革新派をつくり、矢内原忠雄、河合栄治郎教授などのリベラル派と対抗していた。田辺教授は僕の学生時代には、経済原論の講義をしていたが、高等文官試験委員の一人でもあったので、その著書『経済原論』は多くの受験生に読まれていた。その論理は一つの経済学的概念を分類すると、仮りにA・Bの二つになる。この中Bにはこれ以上触れず、Aをさらに分類するとA'・B'になる。このB'にはこれ以上触れず、A'を分類するとA''・B''になる。さらにこのB''に触れず、A''を分類すると……というふう論理を展開していくので、この論理に馴れない読者にとっては難解をきわめた。この書物の書評が、東大学生消費組合の機関誌の『図書評論』にのった。書評子はペンネームだったが、当時東大経済学部学生の平沢道雄君の筆になるものだった。平沢君は東大の学生運動の優秀な指導者で、何度も警察に検挙されたりしていた。僕も彼の友人の一人だった。大内兵衛『経済学五十年』（二九四ページ）の中でも、「たぐいまれな秀才でもあり英才でもあった」が、東大の助手に推薦されながら、ついに成功しなかったいきさつが書かれている。田辺教授はこの書評を大変気にかけていたようだったが、平沢君の筆だと告げるわけにはいかなかった。平沢君はその後、南

方戦線へ送り出されたまま消息不明になった。惜しい人であった。平沢君も田辺教授も二人とも、今は故人になられたので、ここに当時のことを記しても差支えないだろう。田辺教授が、立教大学の実力者だったためだろうか、山下教授のすすめで僕は経済学部一年の時、田辺演習に入って、リカードウの価値論についてレポートを書いた。僕はこのレポートの中で、早稲田の古本屋で買った Karl Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Richardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, 2 Tle., 1905 と、マルクスの『剰余価値学説史』とを対比させてみた。ディールの本は他に、立大図書館に大著 'Theoretische Nationalökonomie, Bd. 1, 1919, Bd. 2, 1924' があったので、これも拾い読みした。ところが思いがけなく、このシュタムラー流の社会法制派——経済が法制を決定するのではなく、法制が経済を規定するという理論のディールは田辺教授のお気に入り理論家であったので、僕はお蔭で大変いい評価をうけることになったようである。田辺教授は柔道部部长をやり、自身でも指にはめる喧嘩道具のメリケンというのを所持していた。ある時、田辺教授の私宅に泥棒が入った。蚊帳の向うにうずくまった泥棒が、ジリジリとつめ寄ってくる気配をしめした。そこで、「来るか」と二、三度威嚇して、追いはらったという。あとで、皆が面白がってどんな声でしたかと聞くと、低い声だと答えられた。ふーん、それならほんものだ、大したものだと笑い合ったりした。田辺教授は五分刈頭で、背は大して高くないが、大層肥満体で、こういう体質によくある細いむしろ女性的な声だった。肥っているせいも、いつも息が弾んで声はふるえを帯びていた。低かった。「低い声」とは、どんな低い声だろうかと思像したりした。田辺教授はいつの間にか、校友会の間にも大きな影響力ができ、断然たる支持勢力があった。

僕にもっとも深い関係があったのは、山下英夫教授だった。山下教授は慶応大学の出身で、河上肇を慕って、京都

大学へいき、立教大学では日本経済史と経済学史を講義していた。『商学論叢』には「社会総資本の再生産に関するケネーとスミスの学説」(上・下)(第七号・第八号)を発表し、後に翻訳書として一冊にまとまったホランダーの「リカードウ研究を読んでいた。この再生産理論研究の日本経済史への適用は、「維新史研究の理論的・実践的要請」(第十二号)であった。元来、小林良正氏など講座派系の理論家との個人的親交もあり、宮川実、長谷部文雄氏などとも交友関係があった。この論文は講座派の立場から猪俣津南雄、榎田民蔵、小野道雄、土屋喬雄などの労農派理論家を批判したものであったが、大胆明快な論文で、当時相当な反響を呼んだ。山下教授はまだ若く、座談の達人であり、われわれ学生はしょっちゅう教授の自宅に入り浸っていたし、教授は学生の下宿へ訪ねて来たりした。ある時などは、僕が下宿を代々木から原宿へ引越すために、三、四人の友人と大八車にのせた荷物を引っ張るのに、つき合せて下さった。五分刈りの頭、青々と剃り上げた鬚あとの濃い顎、幼年時代に小兒麻痺にかかったためのびっここの足、その足に穿いた編上の長靴という姿で、太目の籐のステッキをついて、ヒョコヒョコと歩く姿が好ましかった。日が暮れかかって、月が出ていた。車も人通りも少い夕方の街を、皆で大声で歌いながら大八車を押していった。そんな情景を今なつかしく思い出す。

この当時の大塚久雄教授については、すでに他のところで書いたことがあるので、ここでは特に書かないことにするが、大塚教授は立教の『商学論叢』に、「Joint Stock Company」と株式会社(第一四号)、「チエノヴァのコンペラ、特にサンジヨルチョの企業形態」(第一五号)、を寄稿していた。これらの論文はのちに、大著『株式会社発生史論』(有斐閣、昭和十三年)にまとめられる基礎作業の一つであり、有名な「所謂前期的資本なる範疇に就いて」(法政大学『経済志林』、昭和十年、第八巻第二号)へとつながる方法論の形成途上の一つの産物であった。この時期の

僕にそんなことが十分に判らうはずはなかったが、大塚教授がゼミで熱心に議論をされるのを聞いて、おぼろげにその博識と卓抜な方法論を感じることができた。山下教授が次第に学内行政に忙しくなるにつれて、大塚教授が僕の研究上の指導教授のような役割をひきうけて下さることになった。

## 三

昭和一二年のこの時期は満洲事変（一九三一年）、二・二六事件（一九六三年）を経て、日中戦争のはじまった年であった。もうその前から軍隊への召集はポツポツはじまっていたが、昭和一けたの時代はまだいくらかの大きな牧歌的時代であった。昭和七年（一九三二年）三月に文学部の山田九朗教授が応召された時、『立教大学新聞』（三月一六日号）は、それを報道する記事をかかげて、その見出しに、「山田教授涙の出征」と書き、「同教授は最近愛児をもうけ本学においては、フランス語を担当し、幸福な生活を送ってきたが……召集令に接するや大あわて……」などと書いても、それでまかり通るような時代であった。僕の学生時代には、軍事教練が現在理学部の建物のあるあたりの運動場で行なわれていたが、僕も一時所属していたサッカー部のキャプテンが軍事教官に、今日は練習があるのによろしくと頼むと、よし、と教練を免除される程度であった。そして軍事教練をやっている同じ運動場の別の隅でボールをむやみに追いかけていた。しかし、この頃から次第に情勢は緊迫し、召集も深刻になってきた。そして社会全体が急速に右旋回しはじめてきた。その時期に、しかも右派の中心人物の一人と見られていた田辺忠男教授の下に、立教大学経済学部が若手の進歩的放教授陣を擁して短い黄金時代を迎えたのだから不思議な事も起るものである。

この年、新たに遠山郁三学長が就任し、田辺忠男経済学部長が出来る、経済学部は劃期的な転回をとげることにな

なった。田辺東大教授はその現職のまま立教の経済学部長になった。当時はそんな兼任が許される状況だった。その下に、経済学科長の河西太一郎教授、商学科長の松下正寿教授が並んだ。松下教授は立教大学のはえ抜きで、アメリカのコロンビア大学でドクトルをとり国際法の専門であった。そして大正時代の学長でありキリスト教聖公会の監督の地位にあった元田作之進氏の女婿であるというので重きをなしていた。非常勤にはそれ以前からいた本位田祥男、荒木光太郎、高垣寅次郎がいたし、とくに田辺教授との関係で経営学の中西寅雄教授が入ってきた。氏は経営をマルクス主義経済学というところの個別資本の運動法則の見地からとらえるという立場をとっていた。そして中西門下の鍋島達教授が専任になった。しかし何よりも人々の眼を惹いたのは、若手の優秀なメンバーが専任・非常勤として集中したことであり、山下英夫、柳川昇、田中精一、大塚久雄、飯塚浩二、大河内一男、の名がずらりと並んだのは偉観であった。柳川教授はのちに東大教授を経て、弘前大学学長になられた。田中教授は田辺教授のふところ刀であり、広い額がテカテカと精力的に光っていた。厳格な母堂がいて自宅の床の間には日本刀が飾ってあった。マルクス主義的インフレーション論を展開しヒルファディングの『金融資本論』研究会を主宰していた。飯塚教授はフランス系の人文地理学のすぐれた導入者で、歴史学と地理学とを結合させ、すでにエコロジーの発想をもっており、大塚教授はいつもその学殖を高く評価していた。実に身だしなみの良い人で、またそれにふさわしい長身の美男子であり、のちに東大東洋文化研究所長になった。さらに、昭和十四年になると、宮川実教授と神野璋一郎君とが専任に迎えられる、神野君と僕とが同時に助教授に任命された、そして立入広太郎君が助手に採用された。

これだけの顔触れは当時の東京中のどこの大学を見渡しても、一寸なかった。三・一五（昭和三年）、四・一六（昭和四年）、講座派研究者の一斉検査（昭和十一年）などのあとをうけて、全国の良心的学生たちは、とくに若手では大

河内・大塚の二人に心のよりどころを求めていた。立教大学は他の大学の学生たちから羨しがられたものだった。こうして、立教の学内には学問研究の機運がほうはいと盛り上ってきた。戦争へ向って日本が一路駆け下りていく時代に、ひと時ではあったが、立教に輝かしい日々が訪れていた。

#### 四

立教大学に経済学部ができたのは本当は昭和六年であったが、この昭和一二年のほとんど「創立」といってよいよな展開にあたって、いくつかの改造がそれに伴って行われた。その一つは『立教経済学研究』（機関誌）の創刊であり、もう一つは経済学部研究室の整備であり、第三はアメリカ研究所の創設であり、第四に、学位規程の設置であった。

従来雑誌は『商学論叢』であり、それはそれで優秀な論文が掲載され、立派な雑誌であったが、経済学部これだけの俊秀が揃って研究体制ができてくるとやはり、新しい形式の学術雑誌が必要とされるようになってきた。それに『商学論叢』では経済学部にはピッタリのイメージではなかった。発行所は有斐閣にきまり、今は重役になっている西田勝三氏がその担当になった。『立教経済学研究』という題字も山下教授が凝りに凝って出来上った。あれはどういう集りだったろうか。中央線沿線のジンスカン料理の包（か）の一室に、田辺、河西、山下の諸教授、その他に誰かいられたか、僕も末席にいて、西田氏がそこへ版木をもってきた。皆の顔が輝いていた。新しい経済学部が始まるという意気込みだった。やがて昭和十三年三月発行された創刊号は、当時の時局的反映で、「統制経済・特輯」となっていたが、田辺教授の総論を別にして、大河内、大塚、鍋島、田中、山下、等々という豪華な執筆陣であった。そ



それぞれの専攻にしたがった論文であったが当時のきびしい言論的制約の中でギリギリの発言であり、読者もそれを理解した。とくに大塚論文は西洋経済史の研究者がその方法でもって日本化学工業を分析して、当時のいわゆる「新興工業」の発展の可能性と限界を指摘しているというので注目をひいた。僕もこの創刊号のために、「統制経済戦時経済・文献」目録を李助手との協力で作成したが、この文献目録は第二号へも連載された。これは東大経済学部の資料室を利用して作成したが、若い僕にとって、資料の重みを教えられる貴重な体験になった。創刊号は内容だけでなくその体裁も整ったもので、良質な特漉の用紙と第一級の精興社の印刷技術で、どっしりと落ち付いた雑誌になった。定価金一円は学術雑誌としては、まずまずのものであったが、発売後一週間で売り切れ、たちまち重版になり、幸先が良かった。『経済学研究』の第二号（昭和一四年一月）は「統制経済・特輯・その二」になり、河西、柳川、鍋島、岩沢（寛）らが執筆した。そして、第三号にあたる第二巻第一号（昭和一七年一月）は後に述べるアメリカ研究所との関係で「アメリカ経済・特輯」になり、松下、宮川、飯塚、鈴木が執筆、書評、展望欄に神野、鈴木が入った。僕の論文のテーマは「アメリカ独立戦争の経済的背景」であったが、これはその後の研究の方向を決定する点で僕にとって大きな意味をもっていた。『立教経済学研究』は第三巻第一号（昭和一九年五月）を最後に敗戦を迎えて休刊の止むなきに至り、昭和二五年に復刊をみるまで数年間のブランクを余儀なくされた。

『立教経済学研究』の創刊とならんで、経済学部研究室の整備は当時の重要な出来事だった。かつての学生寮だった煉瓦建の二棟が現在のように一つは経済学部研究室に、もう一つは文学部研究室になった。山下教授が大いに奔走して、丸善から取りよせたガラス張りの書架、デスク、ソファはいずれも立派なもので、いかにも研究の場所にふさわしいような気がした。僕も助手時代には二階の西側に李助手と二人一室で与えられた。後になって研究室の裏口階

段をのぼりつめた突き当りの空間を改造した狭い一人部屋に移った。窓は小さかったが、目の前に銀杏の大樹の枝がひろがって快適であった。

研究室の整備についての山下教授の構想の中にはもう一つのことがあった。資料室の創設であった。ここに基本的な定期刊物や辞典類を備え、さらに非売品の資料・調査報告を網羅的に集めようというのであった。そのための書棚類が買いこまれた。どっしりと黒く光った調度が美事だった。また現在、資料室にある格子型にしきられた雑誌用書棚もその時、考案・発注されたものである。さらに資料類の寄贈依頼および受取礼状の用箋が和紙にセピア色の野をひき、宋朝体の活字をつかって印刷された。研究室が本格的に研究室らしくなりはじめた。ところが困ったことに、この資料の発行をキャッチし、発行者をつきとめ、寄贈依頼と礼状を発送する仕事助手の肩にかかっていた。やりはじめてみるとこれは容易な仕事ではなかった。僕と李君とはほとんど一日の大半の時間を、この仕事のために研究室で過ごすことになった。おまけに山下教授は非常な達筆家で筆を握って巻紙にすらすらと書き下すような能力をもっていた。そして寄贈者へ儀礼をつくすために自らも筆を握って手紙をかいたが、同時に助手に対しても筆墨を用いることを命じた。僕は自分の研究とこの事務労働との間にはさまれて、苦しくなってきた。そしてこの仕事の重要性を認めないわけではなかったが、時間がたつにつれて、ますます苦痛が激しくなった。どういうものか、ずい分努力して資料の発見にとめたのに、山下教授から「これ依頼しましたか」と聞かれると、そんなのに限って見落しがあり、依頼状の発送が行なわれていなかったりした。辛い思いであった。こういう状況は僕をますます研究に駆りたて、睡眠時間を犠牲にするようになった。そして、肉体を酷使することによって、研究が進まない辛さをまぎらせる他はなかったので、苦しさ辛さは悪循環になった。とうとう或る日、たまりかねて山下教授に僕は自分の私費で手

紙の表書をするアルバイトを雇い入りたい、そして自分は研究に専念したい、と申し出た。これが通るはずのないことは初めから判っていた。研究室の体制の完成にあらゆる努力と情熱を注いでいた山下教授を激怒させることになった。山下教授は愛憎の感情のつよい人だった。はじめに僕は分に過ぎた厚意で遇されたが、今度は逆に事毎に逆鱗にふれることになった。しかも事務労働の量は一向に減少しなかった。今でもあの資料室の定期刊行物の書棚の前に立つと、僕は一種名状しがたい感情にとらわれることがある。

## 五

アメリカ研究所設立の動きのくわしいことは僕には判らない。多分、僕に対する好意的配慮からこの学内行政について接近させられなかったのだろう。ただここにはこの計画が難行し、ついに一人のすぐれた人の生命を奪って了ったことだけを記しておかねばならない。さきにも書いたとおり、アメリカ研究所設立の動きと関連して『立教経済学研究』第二巻第一号は「アメリカ経済・特輯」と銘うって発行された。立教大学はアメリカと縁が深いので、図書館にはアメリカの歴史・宗教・文学・経済の珍らしい書物を所蔵していた。これらに加えて、第二次世界大戦の開始直後に図書館長のD・オヴァトンがわれわれのつくったリストをたずさえて帰国して、かなりの数の新刊書を最後の交換船で送ってくれた。このために戦争中は立教大学の図書館は最新の蔵書という点では他のどの図書館にも負けなかった。戦後になってこの優位を守り切ることができなかったのは残念であったが。このような状況は立教大学にアメリカ研究所を設立するためにもっとも都合な条件であった。経済学部部の改革以来、アメリカ研究所の設立が計画されていたが、昭和十四年に設立された時の委員はライフスナイダー総長、遠山学長、曾弥、高松、松下、小山、富

田、十河、オヴァトン、山下であった。これを拡大強化しようとして努力する山下教授の執念を僕は遠くから見守るばかりだった。というのは、この頃僕は山下教授の勘気をこうむって、お宅への出入もあまりできない状態だったからである。

僕の知らない中に破局が突然訪れた。昭和十八年（一九四三年）六月二六日、僕の奥沢の自宅にアメリカ研究所の若いメンバーたち、高妻靖彦、山家豊、川端益博君などが集っている席へ一通の電報がまい込こんだ。「ヤマシタシ ススグコイ」。僕は自分の眼を疑って、頭がくらくらした。そういえば、その数日前アメリカ研究所の発展計画が挫折し、山下教授はその責任から辞任に追いこまれ、全生活をかけて打ち込んでいたアメリカ研究所と一切絶縁することになったと聞いていた。自殺の前日、その頃あまり出入りしなくなっていた山下教授の研究室へ伺って、辞任は残念ですが、皆先生の名を記憶にとどめるでしょうというと、「本当にそう思うかね」と身をのり出して来たあの時のことが一瞬の中に思い出された。自殺は六月二五日、凄絶な死だった。その日から僕は実質上の葬儀実行係になり、目のまわるように忙しく飛びまわった。葬儀は盛大に行われたが、会葬者に囲まれた山下教授の遺児たちのレースの服の白さが人々の涙をさそった。後になって山下教授の死の原因について二つの風聞が流れてきた。一つは、山下教授がアメリカ研究所の公金を使いこんだという説だった。馬鹿げた話だと思った。山下教授には兄思いの弟がいて横浜で工場を経営していて、ずっと経済的援助をしていたので生活に余裕があることは事実だった。ただ激情型の教授は自分のポケットマネーと公金と時々ごっちゃになることがあっただろう、しかし、全体としてみればこれで流用されたのは公金の方ではなく、多分山下家の家計の方だったのではないだろうか。しかし、受領証の整理など要求されたらそれに応じられないだろうなどと想像をめぐらした。僕は具体的な事実は知らないが、教授の人柄からいって

使い込みの嫌疑は全くの冤罪だったと信じている。第二の風聞は、山下教授は思想的な立場から当局の追求をうけ、それがいよいよ身边に迫ってきたのだということだった。この第二の説は当時はよく判らなかつたが、戦後次第に明らかになり、第一回の「無名戦士の墓」に合祀されたことでも立証された。また当時共産党の潜行中の幹部をかくまったりしたという記録が最近になって発表されているという。その頃の厳しい追求、迫害、拷問、弾圧は、危険の身に迫った犠牲者を自殺に追いこむ充分な原因だった。この事情はもちろん山下教授は固く口をとざして、われわれには喋舌らないので、当時は誰も知る由もなかつた。われわれの間でいくらか知られていたことは、「天沼の老人」という人のところに、かなり足繁く出入りしてなにくれとなく面倒を見、また特に六大学野球の入場券をせせせと届けていることだった。そしてこの「老人」は河上肇であることもほとんど人には知られていなかった。

立教に転機が訪れていた。同じ年の七月には、河西教授が立教を辞職された。そして河西教授についても、公金費消の点で山下教授と同罪であるという説が流れた。この点は戦後、昭和二十一年（一九四六年）須藤吉之祐学長、藤原守胤アメリカ研究所長と劇的な対決を行って、この風聞を粉碎し、それが冤罪であることを確認させた。そしてこの時同席された大河内一男、飯塚浩二両教授および学生自治会委員長らの努力によって河西教授の立教復学が実現した。これが戦後の立教再建の大前提であった。しかし、これは尚、後のことである。戦時下の当時、立教は暗い方向につき進んでいた。華かに開幕した戦前の立教経済学部は短い黄金時代は終わった。次の輝かしい時代を迎えるのは戦争が終るのを待たねばならなかつた。

戦争中の立教大学経済学部、敗戦直後のその再建について、僕はもっともっと記しておきたい。しかし、予定された枚数はすでに尽きて了った。それはまた次の記念号の機会にゆずらねばならない。しかしその機会とは一五〇周年

『立教経済学研究』創刊のころ

の記念号を待つということだろうか。長生きしなければならぬまい。